

## 外国語による専門講義の開設(Ⅱ)：外国語修得の壁<sup>†</sup>

真水 康樹

新潟大学法学部

本稿は外国語によって専門講義を開設するにあたって、特に「外国語の壁」に焦点をしばって、自身の留学・語学学習経験にもとづいて考察をおこなったものである。外国語で講義をおこなう意義については普通言語である英語で行うのが理想的という立場に本稿は立つが、東アジアに位置するという日本の地理的条件、あるいは、多くの中国人・韓国人留学生を有するという環境を考えれば、英語を主としながらも講義において中国語や韓国語を使うこと、あるいは、中国語や韓国語で講義をおこなうことの可能性を視野に入れておくことには一定の現実性が見込まれる。何より、筆者の経験によれば、中国語や韓国語ほど日本人にとって学びやすい外国語はないにもかかわらず、その点は日本社会において十分に認識されていない。外国語による講義という高い目標はさておいても、外国語コンプレックスを克服して外国語を身につけるといった単純な目的からでも、中国語(標準語と広東語)や韓国語に一定の認識を持っておくことには十分な価値があると考えられる次第である。

キーワード：救世主としての中国語、韓国語のなかの漢字語、漢字文化圏、中国語バイリンガル、広東語

### 1. はじめに

筆者は、20年にわたり新潟大学法学部および大学院現代社会文化研究科において、英語および中国語で外国人留学生むけの専門講義を担当してきた。また、2004年以来、中国、香港、韓国、台湾の大学で英語や中国語で集中講義を担当してきた。本誌における前稿ではその経験について紹介をさせて頂いた(『新潟大学高等教育研究』第8巻,2021年3月)。続編にあたる本稿では、外国語による講義の前提となる外国語習得およびブラッシュアップの経験やきっかけについて紹介させていただくこととしたい。外国で講義を担当するには外国語の能力が必須となるが、筆者はその面においては極めてスロー・スターターであり、正直、大変な苦勞をすることとなった。どちらかと言えば、外国語が苦手だった者が外国語で講義をするようになった経緯、また、決して若くはない年齢から担当することになった際の困難と打開策を、応用可能な形で整理分析し紹介しておけるなら、多少の意義があるのではないかと考える次第である。

### 2. 外国語修得をめぐる挫折の数々

外国語で講義をすると、日本語のできない外国人の学生とも接点が生じる。これは日本と他国との関係、

他国から見た日本を知るうえで、決定的なアドバンテージかと思われる。流暢な日本語を操る外国人はすでに半分外国人ではない。日本認識においても、日本人とのコミュニケーションにおいても普通の外国人ではない彼らとのみコミュニケーションをして、当該国や当該国の日本認識を理解した気になるのは危険である。そこにはすでに見えない通訳・翻訳が半分介在している。翻訳や通訳を介してのコミュニケーションでは、やはりフィルターがかかる。自分の知らない言葉で通訳が入ると、実際には知らない間に省かれている内容も多く、何が省かれているのかも知りようがないのが現実である。仲介者が気を利かせてオブラートに包んで表現してくれたものも、何がどこまでオブラートに包まれたのか検証することは不可能に近い。通訳を介したコミュニケーションの場合には、自己の伝えんとしたことが本当に正確に伝わっているかを知ることとはかなり難しいのである。そして何より、直接のコミュニケーションができないと、日本語のできる外国人とのみの交流がもつ限界を自覚することができない。もちろん、直接コミュニケーションする場合も事実上の国際共通語である英語を介するのと、相手の言語で直接話すこととの間には大きなギャップがある。

筆者が28歳で北京大学に留学したとき、世界中から

きていた同級生はみな20歳そこそこであった。37歳で韓国に留学したとき、同級生の平均年齢は22歳くらいだった。外国語を学ぶのに少々遅すぎたことは否めないが、それでも決定的に遅すぎはしなかったのかも知れない。もっとも、後述するとおり、外国語の学習にとって一定以上の年齢ラインは残酷である。どうせ勉強するなら、そして、留学するなら早ければ早い方がいい。否、後述するとおり、正確には若ければ若いほどよいのは確かなのである。

筆者の外国語学習の経歴を整理すると、20代後半で中国語を主に北京で勉強した。このときは上達が早かった。3カ月ほどは苦悶の日々だったが、それでも片言の会話ができるようになるのにあまり時間はかからなかったし、言いたいことが大体言えるようになるまでには半年ほどで足りた。その後は3年滞在し続けたので、留学中の到達レベルはかなり高く、その後にそれほど簡単にレベルが落ちるといこともなかった。3年費やした中国語だが、その後極端にレベルが落ちなかったのには、周りに常に中国からの留学生がおり使うことが必須の環境があったこともあろう。通訳の機会も頻繁にあった。ただ、その後、5～6年たって中国語で講義をするようになり、ここでさらに大きな壁を超えたことは確かである。日常会話とは違い、中国語で講義するにはさらに高度な能力が必要とされた。心理的な壁も大きかった。この壁を超えたとき、かなり自信もてるレベルに達したことは疑いがない。韓国語は37歳で勉強を始めたが、年齢の壁もあり、ハングルという文字の取っ付きの悪さも手伝って、進歩は極めて遅かった。頭の反応がとにかく遅い。単語もなかなか覚えられない。それでも5カ月で一定の成果があったが、帰国後はまったく練習するチャンスもなく、その後10年を無駄にすごした。上手ではないから積極的に練習したくなくなる。レベルが落ちたことを自覚しており、それをさらに再認識するのが嫌なので、いっそう使わなくなる。この悪循環で、ますますレベルが落ちていった。あのソウルでの5カ月は時間と費用の無駄な投資だったと後悔し続けた。ところが、約10年たって転機が訪れた。韓国からの留学生が一時的に増加したのである。年齢は50歳近くになっていた。けれども、少なくとも、韓国人学生の日本語よりは筆者の韓国語の方がレベルは高かった。必要に迫られてそして少し優越感をもって「ここが大事」使っているうちに信じられないことにレベルが回復し始めた。そこで気をよくして少し一生懸命に勉強したら、10年

前のレベルは容易に取り戻せた。37歳のあの挑戦はまったく無駄ではなかったことになる。もし、50歳間近の筆者が、このときまったくのゼロから韓国語を勉強しようとしたら、それは難しい話であったらう。しかし、人間の脳とは不思議なもので、あの5カ月の成果は、筆者のなかで10年もの間ひっそりと眠り続けて使われる日を待っていたのであった。そして、それは、きっかけがあれば目を覚ますものだった。ただ、結局、このときは、これ以上にはならなかった。それ以上にブラッシュアップを続ける余裕が、業務上もてなかったのである。ただ、それ以降は、せめてあと半年か3カ月あればもうワンランク上げられる、という自信をもちながら、さらに悶々とした10年が続くことになった。その延長上に、2019年の韓国研修はあった。

他方、この期間には英語に時間と費用を投入することになった。一つは、大学院で英語の講義が始まり、担当希望者は手をあげるとい機会があった。さすがに1人では無理だったが、日本政治史を担当する先生に頼み込んで、その講義のうち外交部分の4回(全14回のうち)を担当させてもらう形で、なんとか挑戦することができたのである。微塵の自信もなかったが、この機会を逃せば、二度と英語で講義する(という決心をする)チャンスは廻ってこないと思ったのだった。最初の講義のときは、頭が真っ白になり、全身汗でびしょり、何を話したかまったく憶えていない。その後も毎回、講義直前になると2日間くらいかけて準備したが、講義中いつも頭の中は真っ白だった。こんなことが、1学期に4回、5年ほど続いた。毎回、毎年まったく進歩がなく、講義のたびに毎回、こんなことを始めたことを後悔していた。正直恥ずかしさとの戦いだったと言ってよい。それと同じ時期に、英語による国際会議が3回ほどあった。なんとかペーパーは出したものの、報告は短い原稿を音読するだけでボロボロ。目も当てられなかった。原稿を読み終わったときの拍手はむしろ屈辱で、励ましの声はいっそう劣等感を刺激した。そのうち最後の一回は小規模なもので、発言したいことが山ほどあったのに、何も言えずに席に居座りつづけた。その屈辱から、週に一度、英国人の先生のもとに通う決心をした。そのときは、すでに50代も半ばだった。それなりの投資だったが、2年たっても目に見えた結果がでなかった。これも無駄になると思った頃に、国際会議があり、ともかくも会場でのオフィシャルな発言が聞き取れるようになっていた。また、以前に交換学生だったロシア人の学生が再度学位取得のために

もどってきて、2年ぶりくらいに私の同じ講義を聴いて、「先生、なんか凄く上手になりましたね」と言われたことも自信になった。外国語の面では教師は学生に励まされてもいいのである。今でも、ネイティブを含めて、自分より英語の上手な学生は沢山いる。しかし、プロである教師にとって課題はむしろ講義の内容であって、英語の上手下手ではないのである。そう気づかせてくれたのは、ある英国の学生が書いてくれた授業評価だった<sup>2</sup>。1学期に4回程度だけを担当していた英語の講義も、いつか1人で全部をやるようになっていた。われわれが講義で使う英語は、国際社会向けに高い柔軟性を備えたEIL（国際語としての英語）である。英語のネイティブと直接話すわけではないのだから、英語としての完成度というハードルを意識しすぎて、それに縛られる必要はないのだろう。聞くに値する内容があれば、相手は、努力してでも聞いてくれるのである。

### 3. 救世主だった中国語と韓国語

この機会に、中国語と韓国語の学習について、経験をまとめおくと、つぎのようになる。なお、ここでは、国交のある友好国での用法にしがって、「朝鮮語」とは言わずに「韓国語」と呼ぶこととする。実際に韓国人と話すときに、朝鮮語と言いつづければ、当然に違和感をあたえる。朝鮮半島を韓半島、朝鮮戦争を韓国戦争と日本語で言われれば違和感があるが、韓国人と話している際には、むしろ逆の方が違和感を意識することになる。そこは、頭のなかで自然にスイッチされているようである。なお、もちろん、日本では韓国語と呼ぶか朝鮮語と呼ぶかは依然として繊細な問題であり続けている。NHKラジオ・テレビ講座で韓国語・朝鮮語だけが、「〇〇語」講座ではなく、「ハングル」講座になっているゆえんである。もっとも、そのせいで「ハングル語」という言い方が疑いもなく使われたりすると、さすがに首をかしげざるをえない。また、「朝鮮」が歴史的な単語であるのと同じように、「韓」も長い歴史とポジティブな意味（偉大な、唯一の）をもった単語であることがあまり知られていないのは残念である。

中国語も、韓国語も外国語としては、日本人には相対的に「楽ちん」な言語である。さんざん語られてきたことだが、日中韓には漢字文化という共通の基礎がある。統計の取り方にもよるのだろうが、70%程度には、同じ単語が流通しているとされている。日中韓のどの国でも、電気は「電気」、学校は「学校」、公園は「公

園」であり、経済は「経済」、貿易は「貿易」、国際法は「国際法」である。違うのは表記の仕方と発音だけなのだ。したがって、中国語や韓国語を勉強するとき、日本人は英語やフランス語やドイツ語を学ぶときのように単語を無理して覚える必要がない。自分の頭の中にある漢字語の日本語単語を、中国語や韓国語の発音に変換して発音すれば、大部分それで通じるのである。ちなみに、中国でも韓国でも「発音」は「発音」であり、「大部分」は「大部分」と呼ぶ。ただ、韓国語には少なからず漢字によらない固有語もあるので、覚える単語がより少なくすむという意味では、中国語の方が少し楽かもしれない。筆者のように北京で、欧州人やアラブ人、ラテン・アメリカ人と机を並べて中国語を勉強した経験があれば誰でも知っていることだが、彼らにとって、習ってもいない単語を山のように知っている日本人はミラクルである。この優位性を利用しない手はない。文法まで似ている韓国人の日本語レベルの高さを知れば、逆もまた真なりである。

中国語学習も韓国語学習も、日本語の単語の中国語や韓国語での発音が想像できるところまでいけばあとは余裕の勝ち戦（いくさ）である。もちろん、そこまでの道には、当然のことながら、一定の困難が待っている。外国語の修得が一朝一夕でできるわけがないのは当たり前である。われわれだって、成長する過程で、十年近くかけて大人の日本語を身につけたのである。

### 4. 日中韓の類似性とハングルの秘密

日本語文・中国語文・韓国語文の近さを示すために、ここで簡単な例をあげることとする。恐縮だが、筆者による新潟大学ブックレットから引用させて頂く。

#### (a) 日本語例文

「日清・日露戦争は日本の近代化プロセスにおける重要な出来事ですが、名前は日清・日露なのに二度とも朝鮮半島が大きな争点であり、朝鮮半島は戦争の災禍にさらされました。まず日清戦争ですが、この戦争は朝鮮半島をめぐる日本と清国との戦争であったという側面をもちます。当時朝鮮は清朝の属邦でしたから、日本の朝鮮への関心は、清朝の目から見れば日本が琉球を自国領としたことに続く、華夷秩序に対する挑戦でした」（『中国周縁の国際環境』新潟日報事業社、2007；9頁終わりから4行目～10頁1行目まで）。

上記の日本語例文を、中国語に訳すと下記のようになる。



(b)中国語例文

「日清戦争和日俄戦争都是日本近代化進程中的重要事件。雖然被稱為日清、日俄戦争，然而朝鮮半島才是這兩次戦争最大の争点。朝鮮半島也因此遭受了戦争帶來的巨大災難。

首先關於日清戦争，從某種角度來說，這場戦争可以看作是日清兩國為了各自在朝鮮的利益所發動的戦争。由於日本在將琉球納入本國版圖之後，又開始關心當時同屬清朝屬國的朝鮮，因此在清朝看來這一系列行為無疑是在挑戰華夷秩序」

もちろん、外国語であるから、一目で意味がわかるわけではない。しかし、少なくとも何について書いた文章であるかは、一目瞭然であろう。漢文の読める人なら、8割方は意味も読み取れるはずである。やはり、漢字文化圏における中国古典の力は偉大である。ところが、韓国語となるとそうはいかない。

(c)韓国語例文（普通のハングル文）

「일청・일로전쟁은 일본의 근대화 프로세스에 있어서 중요한 사건인 바, 명칭을 일청・일로라 하되, 두 번 다 조선반도가 큰 쟁점이었고, 조선반도는 전쟁의 재화에 휘말렸습니다. 먼저 일청전쟁에 대해 말하면, 이 전쟁은 조선반도를 둘러싼 일본과 청국의 전쟁이었다는 측면이 있습니다. 그 당시 조선은 청조의 속방이었으므로, 일본의 조선에 대한 관심은, 청조의 눈으로 보면 일본이 유구를 자국 땅으로 편입한 데 이어, 화이질서에 대한 도전이었습니다」

韓国語アレルギーがあるとすれば問題点はまさにこのハングル文字にある。これが出てくるだけで、接近を拒絶されているとしか感じられない。断言するが、私を含めてほとんどの日本人はここで進軍を阻まれる。しかし、ここで撤退してしまっただけでは、この文章を書き始めた意味がない。中国古典の恐るべき深遠さはここにある。この100パーセントのハングル文から、いわゆる漢字語を拾い出すとどうなるだろうか。つまり、上記(c)の文書から、漢字語を拾って、できるだけ漢字に直すと以下のようなことになるのである。

(d)ハングル・漢字混淆文

「日清・日露戦争은 日本의 近代化 프로세스에 있어서 重要한 事件인 바, 名称은 日清・日露라 하되, 二 번 다 朝鮮半島가 큰 争点이었고, 朝鮮半島는

전쟁의 災禍에 휘말렸습니다. 먼저 日清戦争에 대해 말하면, 이 戦争은 朝鮮半島를 둘러싼 日本과 清국과의 戦争이었다는 側面이 있습니다. 그 当時 朝鮮은 清朝의 屬邦이었으므로, 日本의 朝鮮에 대한 關心은, 清朝의 눈으로 보면 日本이 琉球를 自國 땅으로 編入한 데 이어, 華夷秩序에 대한 挑戰이었습니다」

正直、アッと驚かれた読者も多いものと思う。実際には現代韓国語の中で漢字語の割合は7割程度と言われており、上記(d)のように漢字語を無理矢理漢字に直すとこのようになるのである。「ハングルは平仮名みたいなもの」というのが嘘ではないことがわかる。恐るべしなのは、やはり中国古典と漢字文化圏である。

中学・高校・大学と10年も勉強してきたのに、英語が話せない。いまさら、突然英語を始めたってしゃべれる道理はない。そんなとき、迂回路としての中国語・韓国語は貴重である。少なくとも筆者に関する限り、動詞の変化も時制も基本的に存在せず、単語を憶える必要もなかった中国語との出会いとその学習が、決定的な転機となり、自信をあたえてくれたのは確かである。何より、新潟大学において、海外に派遣された多くの新大生が英語コンプレックスを克服して、外国語のプロに成長していった重要な迂回路のひとつでもある。

5. 外国には違いないがそれでも近い

中国語には日本語にない音が沢山あるから大変である。しかも声調（四声）があり、複合母音も多く、発音を修得するためのトレーニングの大変さは半端ではない。ドイツ語のようにカタカナで書いてすむわけではないのである。

日本語にない音の聞き分けは至難を極める。同じ「オ」「チ」「ジ」にしか聞こえない音のなかに、中国人にとっては違う音が含まれているのである。違いが聞き取れてない以上、正しく発音することなどできるわけがない。しかも、中国語文法の奥の深さも深刻である。「主語」であるかのように文頭にきているある単語が「目的語」だと言われては困惑するばかりである。最初のうちはこういうことがつぎつぎと続き嫌になる。韓国語の場合は、まずはあのハングルなる文字である。縦棒と横棒に点と丸だけでできている。しかも横棒が右に付いているか左についているかで発音が違う。視覚的な誤認も多い。大抵の人が、この無味乾燥な文字

だけで嫌になる。韓国語の発音も中国語ほどではないもののある程度は難しい。そして、日本語並みに多くて複雑な用言の語尾変化。また、例外が多いことにも当惑する。さらに、発音の例外、発音が変わる文字や、発音しない文字の多さなど、発音上も例外が多すぎて、嫌気がさしてくる。論理的には規則的なのが文法のはずである。しかし韓国語の文法は例外ばかりでできあがっているようにさえ見える。しかも、漢字語なのに漢字で書いても、普通の韓国人には伝わらない。

もともと、中国語や韓国語学習の辛い期間は、せいぜい1カ月から、長くても3カ月の話である。まずは、耳が慣れてくる。致命的に見えた発音や声調の違いも、だんだん聞き取れるようになり、個々の音の違いもはっきりしてくる。当然発音も楽になる。もちろん、n と ng の違いなど、もともと日本語にない音の区別は最後まで難しい。ただ、言葉は個々の音だけでできてはいない。実際の単語は複数の音からできあがっているので、ひとつひとつの発音が完璧に正確でなくても、言葉は通じるようになる。また、一定程度の文法は必須だが、言語は結局のところ二つの意味で「量」に帰着する。まずは、3カ月も勉強していれば最初は煩わしかった例外も、頭の中にストックされていき、余裕をもって柔軟に対応できるようになる。初期段階での一定程度のストックが頭のなかに入れば、余裕で分類でき、違いも慌てずに見られるようになる。その意味では、最初の時点で、必死になって片っ端から頭に入れ込むようなガリ勉をすることは、有効だろうと思う。それなしには、この時期は突破できない。その点、長期的にやるよりも短期決戦は効果的であろう。そして、ある時点で、この決戦は確実な勝利に変わる。中国語でも韓国語でも、頭に思い浮かんだ漢字の単語が、自然に中国語や韓国語の発音に変換されて、口からつぎつぎと出てくるのである。もう一つは、話す基本は、副詞や接続詞も含めて、やはり語彙力なのである。この点、先述のとおり、日本人がもっている中国語や韓国語の語彙は無限に近い。英語やドイツ語、フランス語を学ぶときのように、単語を果てしなく憶え続けなければならない、というプロセスは存在しない。

## 6. 中国語のバイリンガルを目指して:広東語の学習

まとめに入る前に、もう一点だけ、挫折の話を付け加えておくのも無駄ではなかろう。実は、韓国語学習に1年先立って、中国語のバイリンガルを目指して「広東語」の勉強をしたことがある。1995年の12月から3カ

月間のことであった。きっかけは、2つあり、まずは1997年に予定されていた香港返還の研究に役立つだろうと考えたことによる。いまひとつの理由は、1988年から1991年の北京大学留学時代以来、多くの親しい香港の友人たちができたことによる。

香港の友人たちはみんな親切で優しかった。けれども、彼ら同士が広東語で話すと、それはそれは騒々しかった。これが興味を持った最初の理由かもしれない。標準語（正確には「普通話」；「北京語」と呼ばれることもあるマンダリンのことである）では一切困らないレベルにあっても、広東語となると、何を聞いても全くわからない。北京人が聞いても広東語は、5%～10%しか理解できないと言われる。同じ中国語なのに理解不可能。これには食指が動いた。

当時の学部長が押してくれたこともあって、返還直前の香港での3カ月の在外研究が認められた。『星島日報』『明報』『文匯報』の3つの新聞を毎日数時間かけて読み込む生活が日常だった。そして、その間、香港人の学生の力を借りて、残りの時間をすべて広東語の学習にあてた。毎日、7～8時間は勉強したのだろうか。ところが一向に上手くならない。もともとの目論見では、1カ月もすれば簡単に身につくはずだった。ドイツ語と英語の関係より遠いと言われながらも、所詮は同じ中国語である。漢字がもとにある以上、発音体系には規則的な対応関係があり、その規則性さえ身につければ、楽々と操れるようになるはずだった。ところが、そう簡単にはいかなかった。まずは、(1)簡単に変換可能なそんなに明快な規則性はなかった。(2)発音も標準語より多様でゼロからの旅立ちだった。(3)声調が9種類もあって標準語の4種類どころではなかった(しかも、新しい発音と新しい声調が同時にくるので、口も耳もついていけなかった)。(4)発音の表記法が複数あった(あくまで方言であって国語ではないのである。国が定める発音表記があるわけではない)。しかも、(5)文章表現も大いに違った。「同じ中国語だから書けば通じる」などと、訳知り顔の言説があるが、とんでもない。広東語では文語でも独自のシステムを持っており、標準語を広東語の発音で読めば通じるという、そんな甘い世界ではなかった。そんなわけで、1カ月で身につけて、3カ月で完璧という計画は絵に描いた餅だった。3カ月かけて、やっと、中級の入り口までたどり着けたというのが実情であった。それでも、帰国直前には広東語で講演できるところまでは何とかいけたのである。

広東語の勉強で恐ろしい経験をした。それは、上達

するにつれて、筆者の標準語での思考を拘束し始めたことである。つまりは、標準語が上手くしゃべれなくなった。実際にはそんなに甘いものではなく、標準語が広東語に乗っ取られた、というイメージに近い。標準語を話そうとしているのに、途中で広東語になってしまう。標準語を話すつもりが、最初から広東語になってしまう。一番恐ろしかったのは、標準語で考えようとしても、いつのまにか広東語で思考している自分がそこにいたことである。「このままでは、標準語までダメになってしまう」。この危機感はただ事ではなかった。他の外国語を勉強したときには、こんな体験は一度たりともなかった。まさに、同じ中国語だからなのだろう。正直、学習にブレーキがかかった最大の要因は、この体験であったかも知れない。もちろん、そのまま続けていけば克服できたのかも知れないが、そんなことは当時、思う余裕もなかった。必死で標準語を防御したというのが妥当かも知れない。そして、日本に帰ってからも案の定、広東語の練習相手はいない。その後20年間に、香港人の教え子は1人しかいなかった。

もちろん、今では広東語を流暢に話すことなど夢のまた夢である。しかし、それでも香港関連のニュースを聞けば通訳なしにわかることも多い。多くの翻訳語が標準語で読むと信じがたい発音になるのに、広東語で発音すれば原音を残していることも理解できる。実際どれだけ多くの漢字の翻訳語が広東で作られたことだろうか。そして何より、唐詩を標準語で読んでも全く韻が踏めないのに、広東語で読めば一発であること。この点を紹介する機会があった高等学校の漢文の先生からは、いままで何度か謝辞を頂戴した。この言葉が中国語全体の中で占める価値、そして何より、広東人≒香港人がこの言葉に対して持っているプライドの重さが理解できること。挫折はしたものの、3カ月必死に勉強したことでえられた収穫は枚挙に暇がない。勉強して良かったと、心の底から思っている。

## 7. まとめ

筆者の北京大学時代、ルームメイトはドイツ人であった。専門が同じでとても気が合って、毎日3時間か4時間、飽きもせず中国語でお喋りをし続けた。あの体験は筆者の中国語学習にとって決定的だったと思う。同じレベルの中国語で話し続けることで、中国語で思考する自然なトレーニングになった。前述のように国際会議で続けて挫折した後、外国人とのメールはすべて英語を使うことにした。中国人に対してでも、で

ある。この習慣が5年続いたとき、英語でものを書き、話すことが苦でなくなっている自分に気が付いた。この2例は、筆者の中国語修得と英語の学び直しにとって、重大な意味があった。決定的な体験として最後に、ここに書留めさせて頂くこととする。

ところで、日本ではどうして、外国語ができることに価値がおかれぬのだろうか。少なくとも、特定の企業を除けば、外国語ができることが採用に影響したり、処遇に影響することはないと言えるだろう。ある政令市職員に「地方公務員になるのに外国語は必要ですか」と聞いたら、「全く要りません」という答えが返ってきた。筆者が卒業させた学生のなかで最も英語ができた学生は、地方公務員になったが、英語を使うのは1年に1回、外資企業の社長が市長に挨拶にくるときの通訳だけだと告白した。

日米開戦の直後、日本は英語を敵性言語として禁止したが、米国は「日本と戦争をするために日本を知る人材が大量に必要」という判断で、有名大学に軒並み日本語学科を新設し大量の日本専門家を育てた。少し別ルートではあるが、この時期に海軍士官学校で日本語を学んだのがロナルド・キーンである。物騒なことを主張するわけではないが、「嫌いなものに、眼を背けて排撃する」という悪癖は今でも克服されていない。それでは少なくとも歴史の教訓にも即していないように思えるのである。

## 註

1)実は年齢以上に、一介の学生として不安定な身分で行く留学と、教員として安定した身分で行く海外研修とでは、経験にもスタンスにも雲泥の違いがある。学生時代の留学経験は、派遣にせよ受入にせよ、学生の気持ちを理解するうえで教員にとってかけがえのない重みを持つかも知れない。主観的な聞き取りだが、韓国の大学では8割近い教員が学生時代に留学を体験し、外国で学位を取得していた。韓国に比べると、日本ではこの比率は極端に低いように思われる。

2)その学生は、「ボクは先生の上手な英語を聞きにきているのではない。ボクにとっては講義の中身が大事だったんです。ボクは先生の講義が面白かった。だから、先生の英語が多少分からなくてもこちらは一生懸命に聞き推測するんです」。だから、英語の上手下手はあまり気にしないでください、という主旨であった。この言葉には正直、おおいに鼓舞してもらった。

2021年9月12日受理